

令和5・6年度新規購入資料紹介 《善光寺如来絵伝断簡》



《善光寺如来絵伝断簡》(部分)

長野市立博物館では、令和5年度から6年度にかけて、《善光寺如来絵伝断簡》(以下《絵伝断簡》とする)計5枚を順次購入しました。その後令和6年10～12月に開催した特別展「長野の仏教美術 江戸時代編—大勧進本孝・等順と善光寺の中興—」で初めて展示・公開しました。

5枚とも横長の画面で、縦横ともにほぼ同じ大きさであることから、絵巻の断簡の可能性が考えられましたが、調査した結果、本来は縦長であった画面を同じ縦幅で切断したものであることが分かりました。本稿では、描かれた場面の内容や形状などについての基本情報とともに、本図の特徴について簡単にご紹介します。

善光寺如来絵伝とは

善光寺如来絵伝は、善光寺縁起で説かれる物語を絵で表したもので、善光寺縁起絵とも呼ばれます。善光寺縁起は善光寺如来が天竺（インド）で出現してから百済（朝鮮半島）を經由し、信濃（長野）で善光寺に祀られるまでの物語です。善光寺信仰は平安末期から鎌倉初期にかけて広く流布したことが知られ¹⁾、それに伴って様々な系統の善光寺縁起が作られたとされます²⁾。こうした縁起から複数の場面が絵画化されたものが善光寺如来絵伝と呼ばれます。

善光寺如来絵伝に限らず様々な絵伝は、大勢の眼前に懸けられて、場面を指し示しながらその物語が説かれる、絵解きに使用されたものです。絵解きは勸進聖かんじんひじりなどと呼ばれる全国を行脚する僧によって、寺社の布教活動や堂舎の修繕・再建費用の集金活動として行われました。

《絵伝断簡》の制作年代

善光寺如来絵伝の絵解きは鎌倉時代から行われていたとされますが、現在確認される善光寺如来絵伝約 60 点のうち、制作時期が中世に遡る作例は 8 点と考えられています³⁾。

その中で、善光寺縁起堂とも呼ばれる善光寺の塔頭淵之坊が所蔵する《善光寺如来絵伝》（図 1）は長野県宝に指定される際、室町後期の制作と判断されました。中世の他作例に見られる大和絵風の技法ではなく、御伽草子系の素朴な様式で描かれることが特徴とされます⁴⁾。

《絵伝断簡》も淵之坊本と同じく素朴な様式で描かれることが特徴で、室町後期以

降の制作と考えられます。断簡ではあるものの、中世に遡る可能性がある貴重な作例です。



図 1 《善光寺如来絵伝》（長野市・淵之坊蔵）中幅

《絵伝断簡》に描かれた場面

《絵伝断簡》に描かれた場面について見ていきます。購入時に番号はありませんでしたが、縁起に照らして第 1～5 の番号を付し、順にご紹介します。善光寺縁起は様々な種類がありますが、《絵伝断簡》と近い関係にあると思われる元禄 5 年版縁起⁵⁾の内容を参照します。

<第1> 善光寺如来、百済から日本へ



善光寺如来が百済から日本へ渡ると告げたため、推明王が船を仕立て使者とともに日本へ送り出す場面です。

画面全体に波が描かれた海上の場面です。画面向かって左上に善光寺如来の御輿を載せた船があります。乗船する人物の向きから想定すると船は左方向に進んでいます。御輿には方形の宝蓋（屋根）があり、その上には宝珠、さらにその上に金色の大型の鳥が載っています。御輿の後方には簾が下げられ側面には幕も下ろされています。御輿の前後には僧が2人いて（なぜか和服）、御輿の後ろには百済からの勅使が2人います。船の前方に笠を被った人物が2人、後方にも1人いて船頭や水夫だと思われる。元禄5年版縁起では勅使の名前を西部姫氏達率奴利致契せいぶきしたつそつぬりちけいと思率多利致衍しそつたりちえんとしています。

画面右下には百済の推明王と后を載せた船があります。船には屋形船のように屋根がつき、屋根の下に推明王が、船の前方に后が座っています。推明王と后はそれぞれ衣の袖で顔を覆い嘆き悲しんでいます。推明王には官吏が従っています。

推明王の船の前方には善光寺如来との別れを悲しみ、入水する後の侍女が2人描かれます。1人は海上に肩から上だけを見せ善光寺如来の方を向いて合掌しています。もう1人は逆さを向いた状態で膝より下の足先だけを海上に見せています。船から海に頭から飛び込んだ姿なのでしょう。

この場面は元禄5年版縁起の挿絵と共通しています（図2。后が立っていることと後方の水夫がいないことが異なる）。

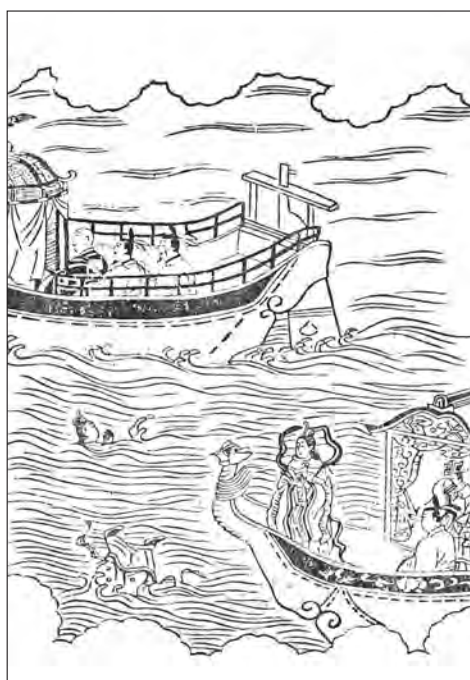


図2『元禄5年版縁起』より転載

<第2> 善光寺如来、内裏に到着



善光寺如来が日本に上陸し、内裏に到着した場面です。

画面左上には欽明天皇がいます。上半身は御簾に隠れ、下半身だけが見えていて上畳あげだたみの上に座っています。天皇の前に善光寺如来の御輿が置かれています。第1で宝蓋の上に載っていた鳥はいません。御輿の右に黒色の衣冠束帯姿の人物が座っています。善光寺如来を日本に受入れて祀るように進言した蘇我稲目でしょうか。御輿の左にも2人、黒色ではない衣冠束帯姿の人物が座っています。

階段を5段降りた庭には、百済からの勅使（ここでは1人）と2人の僧が座っています。2人の僧はここでは和服ではなく袍のように首元が詰まった灰色の衣を着ています。彼らの背後には松があり足元には笹のような植物と岩のような線が描かれます。画面右下には瓦屋根をつけた門と土塀があり、門は黒い扉を内側に向けて開いています。

この場面も元禄5年版縁起の挿絵と共通しています（図3。内裏の場面に縮小され、御輿や着物の柄が異なる）。



図3『元禄5年版縁起』より転載

<第3> 善光寺如来、善光に背負われ信濃へ／善光邸の礼拝



この第3のみ中央で縦に引かれた2本の界線により区切られ、2つの場面が表されています。

向かって左の場面は、難波の堀江に沈められた善光寺如来と本田善光が出会う場面です。

画面左下に岸边と波が描かれ難波の堀江を表しています。岸边には2本の樹木が生えています。岸では本田善光が両手を後ろに回し善光寺如来を背負っています。善光は振り返りながら駆ける姿です。駆けながらさらに飛雲に乗っています。

ここでは、善光寺如来が造形上最大の特徴と考えられる一光三尊で表されず、阿弥陀如来独尊で描かれるのが珍しいです。また、善光寺如来のもう一つの特徴である施無畏印（右手を胸前で前方に向ける）と刀印（左手を下げて拳にし人差し指と中指を伸ばす）を結ばず、両手を胸前の同じ高さで前方に向け指先を伸ばしています（拡大写真は表紙参照）⁶⁾。

独尊に描かれることは元禄5年版縁起の挿絵と共通しています（図4）。他に善光寺如来が独尊で描かれるのは、善光寺如

来絵伝では現存唯一の絵巻として知られる鎌倉市・英勝寺蔵《善光寺縁起絵巻》（江戸時代・17世紀頃。図5）があります⁷⁾。また、現物は確認できていませんが、大阪市・阿弥陀池和光寺に、室町時代・大永初年頃（大永元年は1521年）に描かれた《如来記》なる6巻本があり、善光寺如来が独尊で描かれることが知られます⁸⁾。ちなみに、元禄5年版縁起の挿絵の筆者や祖本については知られていませんが、善光寺如来については三尊で描かれる場面もあり一定しません。複数の絵伝を参考に描かれたのかもしれません。



図4（挿絵の一部）
『元禄5年版縁起』
より転載



図5（挿絵の一部）
『善光寺縁起絵巻』
より転載

2本線で区切られた画面右側は、信濃に帰った善光が私宅の一室で善光寺如来を礼拝する場面です。部屋では善光と妻の弥生、息子の善佐の3人が正座して合掌しています。善光は最も深く拝礼しています。画面右上、部屋の奥には祭壇があり、両脇に花と香炉、中央には高く盛られた飯が捧げられています。この仏飯は3つあり、善光寺如来が三尊で一体であることを示すようです。祭壇の上からは燈明が下げられて

いますが、これは善光寺如来が眉間から放った光により燈明の油がともったという説話を示しているのでしょう。

さて、肝心の善光寺如来の前には御簾が下げられ姿が見えません。善光寺如来が秘仏になるのは、縁起では善光寺如来が渡来してから102年後のことで、善光寺如来のお告げにより戸帳が下ろされます。善光邸で御簾が下ろされているのは縁起や他の絵伝には見えず珍しいことです。

<第4> 善光寺如来、地獄に墜ちた善佐と皇極天皇を救う



善光の息子善佐が頓死して地獄に墜ち、皇極天皇とともに善光寺如来に救出される場面です。画面右側には岩肌が洞窟のように描かれます。左に善佐と飛雲上に立つ善光寺如来がいます。善佐は上下に分かれた白い着物を着て額に三角の角帽子を着けています。善光寺如来は善佐に向かい合うように立っています。ここでも三尊ではなく阿弥陀如来だけの独尊として描かれます。善佐は画面向かって左の方を指さしています。

善佐が指さす先には2匹の鬼に、手を引かれ、追い立てられる皇極天皇がいます。

皇極天皇も額に角帽子を着けて、善佐の方を振り返っています。皇極天皇が連れていかれる先には針の山が見えます。その左にはぐつぐつと煮えたぎる釜が据えられ、赤鬼と青鬼がいます。画面左上に斜めの線が引かれていますが、何を表すものか分かりません。

このストーリーの後、蘇生した皇極天皇の命により善光寺が創建されます。



善光寺の境内です。画面向かって左半分に本堂が描かれます。本堂の前には石灯籠が4基立っています。他に5棟のお堂がありますがいずれも屋根しか描かれないので詳細は不明です。本堂の右隣の屋根は壁がなく柱だけの様子が少し見えるので、おそらく鐘楼だろうと見当をつけることができます。また画面右端には瓦屋根がついた門と土塀があります。

諸本で善光寺境内の描かれ方は様々ですが、本図とほぼ同じ構図を持つのが、江戸時代 天保期（1830～44）の制作とされる長野県立歴史館蔵《善光寺如来縁起絵》です（図6）。長野県立歴史館本ではこの場面は第3幅の一番上に位置しています。《絵伝断簡》も画面の上辺に霞が描かれないことからこの場面が掛軸の最も上に位置したのだらうと想定されます。



図6 《善光寺如来縁起絵》
（長野県立歴史館蔵）第3幅（部分）

《絵伝断簡》の形状

最後に形状についてご紹介します。《絵伝断簡》は5枚ともほぼ同じ大きさで、細長い横長の画面であることが大きな特徴です（各縦26.5～27.8cm、横72.0～72.7cm）。ここから、購入当初は絵巻を切断したものとも考えられましたが、次の2点から元は掛軸であったと考えられます。①第3・4・5の左右中程辺りの同じ場所に、縦に点々と虫食いの跡があります。各場面2箇所ずつ虫損穴が見られ、第5の上の穴が最も小さくて下の穴との間隔が広く、第4と第3の穴の大きさや形はだいたい同じですが、下の穴との間隔は第3が最も狭くなっています。ここから、第3・4・5はもともと1枚の同じ画面で、第5が最も上、第3が最も下に配置されていたことが分かります。そして掛軸が巻かれた状態、すなわち第5が最も外側に来ている状態の時に、掛軸の外（裏）から虫に食われながら侵入されていたということが分かります。（虫損穴の様子は表紙下の写真、向かって左側の鬼の左肩付近を参照。）

②第3には中央で界線が引かれ、異なる2つの場面が描かれますが、縁起の物語からすると、向かって左の「善光寺如来、善光に背負われ信濃へ」という場面が先に出てくる内容です。絵巻の場合向かって右から場面が展開していきますので逆になります。また絵巻であれば、異なる場面の間には界線ではなく、詞書が入るのが通例です。

以上から、《絵伝断簡》はもともと掛軸装であり、縦長の画面が横に切断されたことが分かります。横幅の大きさが一致することは当然ですが、縦幅が同じであるのは、意図的にサイズを揃えて切断されたというよりも、5枚のうち3枚（第2・3・4）には上下に黒い霞が表されるので、もともとと同じ縦幅に区切られた中に各場面が描かれていたと考えられます。

先ほどご紹介した淵之坊本もそうですが、中世制作の他の諸本では霞の間隔は場面毎に異なっています。霞の縦幅の間隔が一定のものは江戸時代後期頃の作例に見ることができます。絵伝が描き写されていく中で場面の描かれ方が整理されていったの

でしょう。《絵伝断簡》は場面の縦幅が同じような間隔で描かれる早い時期の作例ということになります。

ちなみに、絵巻が切断されて断簡となったものは多く知られますが、掛軸装の本紙が横に切断されて断簡となったものもあるようです⁹⁾。

まとめ

《絵伝断簡》の制作年代や形状、描かれた場面から本図の特徴を見てきました。頁数の関係で簡単な紹介となりましたが、今後特徴的な図像や他の諸本との共通点を検討することで、本図の性格をもう少し詳しく探ることができそうです。善光寺関連の展示の際は登場すると思いますので、ぜひ関心を持ってご覧いただければ嬉しいです。（竹下多美）

〔謝辞〕

本稿執筆にあたり、長野県立歴史館様と淵之坊様には調査及び写真掲載に関して御高配を賜りました。ここに記して御礼を申し上げます。

〔掲載図版〕

《絵伝断簡》は大井川茂兵衛氏に撮影を委託。図1・6は筆者撮影、図2～4は註5『善光寺如来縁起一元禄五年版』より転載、図5は註7『善光寺縁起集成別巻 善光寺縁起絵巻一鎌倉・英勝寺蔵せんくはうしゑんき』より転載。

註

- 1) 坂井衡平『善光寺史 上・下』（東京美術、1969年）
- 2) 倉田邦雄・倉田治夫編『善光寺縁起集成Ⅰ』（龍鳳書房、2001年）
- 3) 吉原浩人『「善光寺縁起」と『善光寺如来絵伝』（安城市歴史博物館 特別展図録『ものがたり善光寺如来絵伝』2002年）
- 4) 矢島新氏による『長野県指定文化財候補物件調査票』が公開されている。
- 5) 小林一郎『善光寺如来縁起一元禄五年版』（銀河書房、1985年）
- 6) 胸前で立てた両手を前方に向けるのは転法輪印だと思う

- れる。転法輪印を結ぶ善光寺如来像については、拙稿「仏教絵画を解説するー善光寺式阿弥陀三尊絵像手指のかたち」（地方史研究協議会編『日本の歴史を描き直すー信越地域の歴史像』文学通信、2021年）を参照。
- 7) 《善光寺縁起絵巻》については、倉田邦雄・倉田治夫編著『善光寺縁起集成別巻 善光寺縁起絵巻一鎌倉・英勝寺蔵せんくはうしゑんき』（龍鳳書房、2003年）を参照。
 - 8) 前掲註1 坂井氏『善光寺史 上』。
 - 9) 絵伝の中では、大阪市・四天王寺と神奈川県立歴史博物館に所蔵される《聖徳太子絵伝断簡》が、元は同じ絵伝だったのではないかと考えられている。龍谷ミュージアム特別展図録『真宗と聖徳太子』（2023年）を参照。

博物館だより 第132号 発行日2024年12月27日

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414

TEL:026(284)9011

<https://www.city.nagano.nagano.jp/museum>

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠栃原3400

TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659

TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3

TEL:026(262)3500